日記をめぐる二つの物語：ヴァージニア・ウルフの「ジョウン・マーティン嬢の日記」と「遺産（レガシー）」

舟　橋　美　香

（1）

Virginia Woolf は，生涯に三つの日記を書いた。一つは自分自身のために，一つは十六世紀初頭に生きて独身で死んだ領主の娘として，そしてもう一つはウルフと同時代に政治家の妻として生きた女性として。

私がこの論文でとりあげるのは，ウルフが書いた架空の日記をめぐる二つの短編小説 “[The Journal of Mistress Joan Martyn]” と “The Legacy” である。ウルフの作家生活のほぼ始めと終わりに書かれたこの二つの物語は，まるで合わせ鏡のようにお互いを映しあい，一つのテクストとして読めるように思われる。そうして見えてくるのは，“Women and Fiction” でウルフが「男性系の歴史」(141) と呼んだ英国の歴史が，欄外（マージン）に押しやってきた女性の生の営みと，そのマージナルな場から社会を見つづけ，自己の存在の意味を語ろうとした女性の声の記録である。ウルフは，*A Room of One's Own* で，歴史の欄外にある「これらすべての名もないひとびとの生活は記録されるのを待っている」(85) と書いている。ウルフにとって，このような女性たちの生活と内なる思いを描くことは，支配と富と権力を追求し闘争をくりかえしてきた人類の歴史が，その破壊への道をこれ以上つき進まないためのもう一つの視座を呈示することであったはずだ。

ヴァージニア・ウルフが『自分だけの部屋』で，「両性具有の頭脳（the

androgynous mind)」(94) を作家は持つべきだと言ったとき，それは，Elaine Showalter が *A Literature of Their Own* で考えたように，「女性らしさ，男性らしさと対決することから逃避」(289) しているからではなかったろう。Terry Eagleton は，*Literary Theory* のなかでこう言っている，「女性運動のメッセージは，運動の外部にいる人間によって解釈されているような，女性が男性と平等の権力と地位を持つべしということではない。むしろ，女性運動は，そうした権力や地位の全てに疑問を投げかける。女性運動は，より多くの女性が社会に参加すれば，それだけ世界が繁栄するといいたいのではない。女性は人間の歴史の『女性化』がなければ世界は生き残れない，と語っているのだ」(230)。ウルフが考えていたのは，まさにこのことではないだろうか。ウルフの「両性具有」は，イーグルトンがここで言う「女性化」とほぼ同義ではないかと，私には思われるのだ。

とするならば，ウルフにとっての「問題は」，Minow・Pinkney が指摘しているように，「女性的なものを抑圧することが主体たる人間が言葉を扱う状況であるなら，どうしたらこの女性の言語 (feminine language) を可能にするか，ということ」(17) になろう。そして，女性の語りを困難にしている原因は，それを語る女性の側と聞き手の男性側の意識の両方にあったといえるだろう。つまり，女性は，「男性によって書かれた文学によって，自分たち自身の普通のつつましい経験は，記録に値しないと教えられていた」(DeSalvo 76) し，一方男性は，女性の話すことを「おしゃべりで騒々しいただのむだ話」と考えるか，せいぜい「つぐみの歌」(“Women and Fiction” 148) のような，自分とは異なる生きもののたまに耳にはいれば美しいと気づく小さなさえずりとしてしか考えていなかった。となれば，女性は自分の書くことに価値が見い出せず，早晩書きつづけることをやめてしまうかもしれない。そして，書かれたものは，「古い日記の中に錠をかけられて寝ている，古い抽出し中に押し込まれて

人目につかずにいる，古老の記憶の中で半ば消し去られているのである」(“Women and Fiction” 141)。[1]

「ジョウン・マーティン嬢の日記」は，まさにこのようにして書かれ，そしてしまい込まれた一人の女性の日記が発見され，再びその声を取り戻すまでの物語である。1906年に書かれたこの短編の後半で，当時 Virginia Stephen であったウルフは，ジョウンの日記をそのままの形で再現して見せている。十五世紀の末に荘園領主の娘として生まれたジョウンが，間近に迫った自分の結婚について考え，トロイのヘレンの物語に胸躍らされ，自分の日常を書きつづけることに次第に興味を失って日記を書くことをやめようと決意するまでの，ほぼ一年の記録として。

このジョウンの日記を，ノーフォークの古びた家のなかで発見するのは，歴史家の Rosalind Merridew という女性である。ジョウンの日記を所有していた，彼女の子孫の Mr Martyn は，「彼女は私たちみんなとまったく同じですよ，私の知るかぎり，少しも目立ってすぐれたところはありません」(45) と話す。しかし，中世イングランドの土地所有の研究で，ケンブリッジやオックスフォード，果てはベルリンやフランクフルトにまで名を知られた歴史家ロザリンドは，ジョウンの日記を見て息をのみ，震えを隠しきれないほど興奮するのである。

歴史のなかの名もない人達の暮らしぶりに関心をもつ女性の研究者が，埋もれていた女性の日記に価値を見いだすのは，しごく自然なことであるかもしれない。そしてまた，日記という記録形式は，人間が他人の目と耳を気にしないで自分だけの思いを綴る場として古くから存在し，[2] また Samuel Richardson らが文学のなかで利用してきた手段である。当時若干24歳のウルフは，女性の日常と内面の両方を小説のなかで描くためにふさわしい自分なりの方法を，まだ獲得してはいなかった。ジョウンの声を日記のなかに再現し，その忘れられていた声がロザリンドによって発見されるまでの過程をドラマとして描くというこの作品は，女性が書くこと

の難しさとその価値を，もっとも素朴な方法で示そうとしたウルフの最初の試みであると言うことができるだろう。

ウルフは，「ジョウン・マーティン嬢の日記」を書いた翌年に *Melymbrosia* に着手する。これが，彼女の最初の長編小説 *The Voyage Out* となるわけだが，そのなかでウルフは，より大胆な方法で同じ問題を扱おうとしている。それは，女性が男性のまえで，今まで言わずにいた自分だけの思いを語る瞬間を描く試みである。特に重要なのは，第16章，男性としては理想的な聞き手 Terence Hewet に促されて，主人公の Rachel Vinrace が，若い女性でいることで感じる幸福と惨めさを語ろうとする場面である。小説家志望で，女性の真の姿を知りたいと願うテレンスに，自分の日常のこまごまとした暮らしぶりを話すうちに，自分の話すことは重要なのだと再認識するようになってきたレイチェルは，しかし，このとき自分の幸福と不幸を語ろうとして躊躇する。テレンスが聞きたいと要求していることは，彼女にとって，「いまだ誰も踏み込んだことのない生の大きな虚空」(260) として自分のなかにある，だれにも言いたくない存在の秘密であるからだ。にもかかわらず，レイチェルは「言葉を紡ぎつづける」(261)。それは，女性の真の姿が話されたときに男性が感じる驚きと畏れを描くことを，ウルフが必要と考えていたからにちがいない。(3)

以後のウルフの小説において，このような女性の内なる思いは，ほかの登場人物に聞こえることはない。(4) *Mrs Dalloway* や *To the Lighthouse* はもちろんのこと，『船出』に続いて伝統的手法で書かれた *Night and Day* でも，Katharine Hilbery の存在を支える意識の核は，彼女の恋人に直接知らされることはない。それは，小説のなかにあってさえ，他人が踏み込むことのできないプライヴァシーとして，「一緒に暮らす人間のあいだにもなくてはならない自由(ライセンス)，ささやかな独立」(*Mrs Dalloway* 10) として，女性の意識の聖域として保たれることになる。それは声になることのない沈黙の領域として，ただ読者にのみ公開されるのである。

「このような説話の空間は，読者との沈黙の対話をつくりだし，読者は小説のなかの沈黙し観察する女性登場人物と同じく能動的で洞察に満ちた場をもつことを求められる」(Laurence 59)。たしかに，この沈黙のうちにある意識の空間を，途切れることのない連鎖を紡ぎ出す豊饒なイメジで文字化したことが，ヴァージニア・ウルフのフェミニスト・モダニストの証左であろう。しかし，そうであることを十分に認める一方で，レイチェルがテレンスに向かって，

> 'A girl is more lonely than a boy. No one cares in the least what she does. Nothing's expected of her. Unless one's very pretty people don't listen to what you say... And that is what I like....' (261)

と話し出すときの，短く明るいスタッカートのような声の響きは，長い楽節をつくりあげる沈黙した意識の流れとは別の，女性の語りの魅力ではないだろうか。これが，『船出』以降のウルフの小説のなかで，あまり聞こえなくなってしまっているように感じ，そのことを残念に思うのは私だけだろうか。

このすこし子供っぽい短文の連続するはなしっぷりは，もちろん，*The Waves* にも散見されるものだが，1940年10月に書かれた（Dick 311）短篇「遺産」のなかに，ふたたびあの真摯な響きをともなってあらわれるのである。物語の始まったときにすでに死んでこの世にいない女性 Angela Clandon の日記のなかに。[5]

「遺産」は，ウルフが印刷されることを前提にして完成させた最後の短篇でもある。アメリカの雑誌 *Harpar's Bazarr* の依頼に応えて書かれたこの短篇は，しかし，彼女の生前に出版されることはなかった。原稿を受けとった *Harpar's* が掲載しない決定を下したからである。[6] 交通事故で妻アンジェラを失った Gilbert Clandon が，彼女が遺した日記を読む

うちに，妻が実は愛する男のあとを追ってみずから車道に飛び出して自殺を遂げたという事実に気づくという筋立てが，第二次世界大戦下の読者に与える影響を懸念してのことか，あるいは，アンジェラの「恋人」B.M.が社会改革を説くマルクス思想の信奉者であることが問題となったのか，掲載を断念した雑誌社の真意については推測の域を出ない。不掲載の理由の説明を編集者に求めたウルフ自身が，結局「納得のいく解答を得られなかった」(Dick 311) のだから。

とはいえ，ウルフが二度にわたって *Harper's* に手紙を書いたという事実と，その文面にあらわれた怒りは，[7] 彼女がこの作品のできばえに自信をもっていたということの証左となるばかりではなく，「遺産(レガシー)」が印刷されることがウルフ自身にとって危急のことであったようにも感じられる。彼女の二通目の手紙は，1941年2月3日に書かれているが，ウルフが自殺を遂げるのはそのほぼ二ケ月後のことであった。アンジェラというひとりの女性が夫に遺した日記をテーマとする物語を「遺産(レガシー)」と名づけたウルフは，この短篇を彼女から読者に渡される最後の作品と考えていたのではないだろうか。「ジョウン・マーティン嬢の日記」で取り上げた女性の日記というテーマを，作家生活の「遺産」として書き直したウルフの意図に，これから迫ってみたい。

(2)

「ジョウン・マーティン嬢の日記」と「遺産(レガシー)」を，ウルフの作家としての一生の両側で向かいあう鏡のような物語として，[10] つまり，お互いを映しあい，また一方で欠けているものを補強しあっている一つのテクストとして読んでいこうとするのが，私の試みである。そこではじめに，ジョウンとアンジェラの家庭での生活が彼女たちの境遇の違いと社会の変化によってどのように異なった像を映し出しているのかを，ウルフがこの二作品でとった女性の日記を小説に再現する方法と絡めて，比較していきたい。

つぎに，二つの日記が鏡として映し出すものの違いについて考察し，さいごに，女性の書き(ライティング)ものが置かれた状況を日記の読み手の問題から検討してみたい。

ではまず，ジョウンとアンジェラの生活の違いを作り上げている大きな要因を整理しておこう。ジョウンの言葉を借りて言えば，結婚ほど「女性の生活において大きな変化を意味する出来事はありえない」(51)。とするなら，ジョウンとアンジェラは，まず，その結婚の前と後に身を置く対照的な女性として設定されていることになる。これは，二つの短篇を執筆したときのウルフ自身の境遇の違いの反映でもあるだろう。一方，彼女たちは両者とも，程度の差こそあれ，当時の上流階級に属していることでは共通点をもってもいる。しかしながら，彼女たちが生きる時代を隔てる四百年のあいだに，英国は産業革命を経験し，それにともなって生活の場を求めて人々が農業地帯から都市部へと流入した。娘と妻という家庭での地位の違いと，社会全体がこうむった変化が分かちがたく結びついて，彼女たち二人の生活は作り上げられている。このことを念頭におきながら，荘園領主の娘であるジョウンがノーフォークで送る生活と，政治家の妻であるアンジェラがロンドンで経験する生活を，順を追ってみていくことにしよう。

ジョウンの日記の冒頭は，一月のある日のこと，日が沈むと，ジョウンの母が「みんななかにいますね？」と大声で言って，農作地にまだ出ているかも知れないものを呼び戻すためにドアの外のベルを鳴らし，玄関の門を閉める場面から始まる。そして，「全世界は私たちの外にかんぬきによって締め出される」(45)。門を閉める母の姿を描いた後すぐに，「私」ジョウンは，外に拡がる世界への渇望を表明している。「私たちの鉄の門の外」の「この自由で美しい場所—イングランド全土と海，その向こうの国々のすべてが押し寄せてくるような思い」にとらわれて，「なかにいれてあげ

て。なかにいれてあげて。そうしないと苦しいわ！（We are starving!）」（45）と言って，ある晩母を起こしたことがあったという経験を記録することによって。その一方でジョウンは，「父がロンドンに行っていて，弟 Jeremy を除いて兄たちが軍隊に行っている」（45-46）いま，自然の猛威からも「小路にたむろしたり森に隠れ潜んでいるあの悪い男の人たち」からも「私たちの大きな門」（45）が護ってくれていることを嬉しくも思う。ジョウンの日常は，彼女たちの安全を支えるこの「大きな門」（47）の内と外，すなわち，家とその外に拡がる世界に対して，彼女が感じる愛情と気づまり，憧憬と恐怖のつづれ織りである。DeSalvo は "Shakespeare's *Other* Sister" のなかでこの場面を引用し，日記を発見した「ロザリンドの自由とジョウンの監禁状態との対比と，ジョウンの監禁状態とマーティン夫人が自分に課した（あるいは課せられていた）孤独との相似性は，注目に値する」（69）と考察している。

しかしながら，この閉ざされた空間である家庭は，男性不在ゆえに，女性が力を発揮する場ともなる。母が「家のもの皆を支配している」（46）ことに気づいているジョウンは，「女性が自分の社会で力をもつ唯一の方法は家庭を支配することだ」（DeSalvo 69）と学んでいるわけだが，その特権はすべての女性にではなく，結婚して妻という地位についた女性にのみ与えられるということをも認識している。結婚は，「父の家のなかの飛び去っていく影のような顧みられることのない存在から，しっかりとした重みをもった，ひとが気づいて道を開けてくれる重さをもった肉体へと，女性を突然に作りかえてしまう」（51）大きな変化として，ジョウンには感じられる。

このような家庭のなかでの未婚の娘としての生の頼りなさは，この短篇に先行する作品 "[Phyllis and Rosamond]" でウルフがすでにとりあげているテーマである。サウス・ケンジントンで父母たちと暮らしている Hilbert 姉妹の長姉フィリスは，両親が留守のとき以外友人たちを家に招

くこともできない理由を，ブルムズベリで比較的自由な生活を送る Miss Sylvia Tristram に説明して，「私たちには部屋がない，というのがひとつ。それに，そんなことをすることは許されません。私たちは娘なんです，結婚して妻となるまでは」(27) と言っている。Q. Bell の言葉を借りて言えば，当時「ケンジントンは聞こえのいい住所であったが」ブルムズベリは「そうではなかった」(150) し，よく知られているように，ケンジントンはウルフ自身が父 Leslie Stephen が死ぬまで兄姉弟たちと暮らしていた場所であり，ブルムズベリは彼女がその後移り住んだ地である。ウルフは，自分自身が経験した「父の家のなかの」娘としての閉塞した生活と，親の不在によって獲得した自由とを，この二つの土地に住む対照的な女性たちにそのまま付与したのだろう。「フィリスとロザモンド」においてウルフは，ケンジントンに住む「家庭の娘たち」(18) にとっては，二十世紀になってもまだ結婚だけがささやかな自由を手にいれる唯一の手段であることを，示唆しようとしたのだと考えられる。

ジョウンに話を戻そう。十六世紀初めの荘園領主の娘にとって，結婚は，二十世紀初頭の都市に住む中産階級の娘たちよりも多くの力を約束してくれるものであることが，ジョウンの日記に表明されている。母から近隣の領主 Sir Amyas から結婚の申し込みがきていることを聞いたジョウンは，結婚によってもたらされる変化を期待をもって思い描く。

> And so, every maiden waits this change with wonder and anxiety; for it will prove whether she is to be [an] honorable and authoritative woman for ever, like my mother; or it will show that she is of no weight or worth. Whether in this world or in the next.
>
> And if I marry well, the burden of a great name and of great lands will be on me; many servants will call me mistress; I shall be the mother of sons; in my husband's absence I shall rule his people, taking care for herds and crops and keeping

watch on his enemies; within doors I shall store up fine linens and my chests shall be laden with spices and preserves; by the work of my needle all waste of time and use will be repaired and renewed so that at my death my daughter shall find her cupboards better lined with fine raiments than when I found them. (51)

結婚とは，自分の家の門の外に出て，再び別の門のうちに入ることにほかならない。ジョウンは，さきにみてきたように，門の外の世界に憧れ，閉鎖された場である家庭の内側にとどまることに窒息するような思いを感じている。にもかかわらず，この引用に見られるように，結婚は，家庭という小世界にあって女性が自分の力を発揮できる範囲を格段に広げてくれることも事実なのだ。娘から妻，母となることは，自分の下に支配するものを多くもつことができるため，女性にとっては，自由になる力，権力の増大を意味する。家庭以外の場で女性がみずからの才能を開花させることがほとんどできなかったジョウンの時代にあっては，土地と家来をもった男性と結婚して「奥方様」となることが，普通の女性が望みうる栄華を約束する方法であったことは間違いあるまい。

では，アンジェラの日常はどうであろうか。「遺産（レガシー）」に話を移すまえに，この二つの短篇では女性の日記を読者に呈示する方法が大きく異なることを確認しておこう。ジョウンの日記は，ロザリンドによって発見された十六世紀初めに生きた女性の生活の証拠資料（ドキュメント）として，そのままのかたちで作品の後半におかれている。資料の重要性は，ロザリンドがこれを発見したときに見せる興奮によって読者に感得されるが，ジョウンの日記の記述に対してロザリンドの意見，考察が加えられることはない。これに対して，「遺産（レガシー）」のなかのアンジェラの日記は，夫ギルバートが拾い読みする断片となってあらわれる。アンジェラの日常は，ギルバートによって取捨選択され，その全貌を読者の前にあらわすことはない。断片と断片とのあいだ

を埋めているのは，政治家であり彼女の夫である男性ギルバートの意識である。この読み手の問題については，論の最後で検討することにするが，「遺産（レガシー）」は，死んだアンジェラが日記のなかでもう一度その生を取り戻し，夫と沈黙の対話をくり拡げることによって，ふたりの結婚生活を問い直す物語であることを強調しておきたい。

もう一つ，ジョウンとアンジェラの日記には大きな違いがある。ジョウンの日記は「とても誇らしい思いで」書き始められ，「私のささやかな日常生活には語るに足ることなど何もなく，記録することはどんどんつまらなくなってきた」(61) という思いから書くことをやめてしまうまでの，たった一年の記録である。このなかで，季節は移り変わるがジョウン自身は変化することはない。これに対してアンジェラの「十五冊の」(281) 日記は，彼女がギルバートと結婚してからの長い歳月を記録している。ジョウンの生活が季節の移り変わりを映しているとすれば，アンジェラの日記は，それを綴る彼女自身の変化を照らし出す。日記にあらわれるアンジェラの生活は，その最初と最後とでは大きな変化を示すことになる。このことを念頭に置きながら，アンジェラの結婚生活がジョウンの送った生活とどのように異なってくるのか，見ていくことにしよう。

家の外に拡がる世界を見てみたいというジョウンが表明している夢は，政治家の妻となったアンジェラにとっては，ある程度現実のものとなっているようだ。彼女は，夫が選挙で当選したあと，一緒にヴェネツィア旅行を楽しんでいる。アンジェラはこの旅行のことを日記に書きとめている。これを読むギルバートに，「あの幸福な休暇」(284) の記憶がよみがえる。彼は，「彼女の女学生のような筆致」や，「アイスクリームに目がなかった子供っぽさ」をいとおしみ，「ギルバートは共和国総督の歴史について話してくれた」というくだりを読んで，アンジェラが，「私はほんとになんにも知らないんですもの，とそれがまるで彼女の恥ずべきことであるかのように，よく言っていた」(284) ことを思い出す。しかし，このようにし

て読者に呈示されるクランドン夫妻の新婚当時の幸福な日々のなかにも，ギルバートとアンジェラのあいだに広がっていく亀裂の端初を読みとることも可能であろう。アンジェラはみずからの知識の不足を恥じてそれを補おうとし，一方のギルバートは「彼女と旅行する楽しみの一つは，彼女がなんでも知りたがることだった」(284) と感じている。ということは，もしアンジェラが，彼女が願っていたように，彼と同じくらいの知識をもってしまったら，ギルバートは妻の可愛らしい魅力が失われたと感じたにちがいない。アンジェラの子供っぽさや教養不足を魅力と考えるギルバートの姿勢は，妻を自分より劣った存在として捉えようとする彼の意識を反映しているということもできるはずだ。

ジョウンの時代に荘園領主の妻となることで女性が担っていた責任は，政治家の妻としての役割として，アンジェラが果たすことを期待されているようである。彼女の日記には，はじめて夫の上司に会うときに，「良い印象を与えるかとても心配だった」というアンジェラの不安が書きとめられているが，これを読んだギルバートは，彼女が「あの手強い御老体」(284) を征服してしまったことを思い出す。アンジェラは日記に，下院での晩餐会での様子や，ある晩餐会で「ギルバートの妻としての責任を自覚しているの？　と Lady L. に尋ねられた」(284) ことを記している。ギルバートは，妻が秘書の Sissy Miller とともに仕事をしていた机に目をやって，アンジェラは「高名な政治家の妻の運命としての責務の彼女の役割を果たしていた」，「自分の出世に彼女は最大の助けとなっていた」(284) ことを述懐するのである。

しかし，このあとにつづくアンジェラの日記は，ギルバートが仕事に熱中するにつれて，彼女がひとりでいる時間が多くなってきたことを記録している。アンジェラがロンドンの家で政治家の妻として担っている役割は，ジョウンが思い描いた四百年前のノーフォークの領主の妻としての家庭での仕事の範囲に較べると，ずっと限定されたもののように感じられる。そ

のうえ，子供にも，クランドン夫妻は恵まれない。アンジェラはこのことをひどく残念に感じ，「どんなに…ギルバートに息子がいたらいいでしょうに！」(284) と書いている。しかし，これを読むギルバートは，子供がいないことを「不思議なもので，一度もそんなに残念だと思わなかった。人生はそのままで十分満たされており十分豊かなものだった」(284) と考える。妻の孤独に彼が少しも気づいていなかったことは，あまりにも明白である。

このような夫婦生活で孤独感を強めるアンジェラは，家庭の外でなにかしたいのだという自分の意向を，やっとの思いで夫にうちあける。ギルバートの記憶には，その時のアンジェラが，「自分がとっても怠惰で，なんの役にも立ってないように感じるの。なにか自分自身の仕事をもてればと思うの」と言って，「可愛らしく頬を染めた」(284) 様子がよみがえる。彼は，「自分の世話をしたり，家庭のことをするだけでは十分じゃないのかい？」(285) と彼女をからかったことを思い出す。彼のこの一言によって，彼が，アンジェラの必死の思いをまったく理解していなかったことは，明瞭であろう。ともあれ，ギルバートは妻の望みに異議を唱えず，アンジェラは毎週水曜日にロンドンの Whitechapel 地区に通い，「十人の子供を抱えた」女性や，「事故で片腕を失った夫」(285) をもつ女性たちの職探しを一生懸命手伝うようになる。当時の政治家の妻としては，このような慈善活動が，夫の体面を傷つけずにすることができた唯一の社会参加の方法であったはずだ。家庭のうちにあって自分の存在の意味を見いだせなくなったアンジェラが，この社会奉仕活動を生のよりどころとしたことは，彼女の日記が以降ほとんどこの活動の記録で満たされていくことで示されている。

妻のこのような社会とのかかわりあいを，ギルバートが，決して好ましいものとは受けとっていなかったことも明らかにされている。彼は，貧しい人達の住む区域に行くときに妻が着ていた「服がどんなに嫌であったか

を思い出」(285) す。政治家という公職にある彼は，妻がそれに似つかわしい装いをしないことに嫌悪感を覚え，一方，アンジェラは，自分よりつつましい生活を送る人達への思いやりから，自分の階級にあった服を着ることを控える。アンジェラのこのようなふるまいはギルバートによって「彼女の非凡な同情の才」(her genius for sympathy) と作品中で二度 (282 lines 7 & 35) 呼ばれている[9] 資質のあらわれと考えられる。しかし，彼女が週に一回身につける服装をめぐるふたりの意識のズレは，アンジェラが社会を見る視点が微妙に変化し，夫妻のあいだに溝が深まっていく前兆ともとれる。事実，これ以降のアンジェラの日記は，ギルバートが思いもよらなかった妻の姿を見せることになるのである。

(3)

日記は，それを綴る人間にとっての世界と自分自身を映す鏡と考えることができるだろう。では，ギルバートは，アンジェラの日記に何を見いだすことを期待していたのか。彼が妻の日記をはじめて手にとる場面が，この問いの答えを提供してくれるに違いない。

A curious, perhaps a fantastic idea occurred to him as he returned to his chair. Could it be, that during all those years when he had scarcely noticed her, she, as the novelists say, had entertained a passion for him? He caught his own reflection in the glass as he passed. He was over fifty; but he could not help admitting that he was still, as the looking-glass showed him, a very distinguished-looking man.

'Poor Sissy Miller!' he said, half laughing. How he would have liked to share that joke with his wife! He turned instinctively to her diary. 'Gilbert,' he read, opening it at random, 'looking so wonderful....' It was as if she had answered his question. Of course [,] she seemed to say, you're very attractive to women. Of course Sissy Miller felt that too. He read

on. 'How proud I am to be his wife!' (283)

答えは明らかすぎるほどであろう。彼はアンジェラの日記を，彼自身の姿を映す鏡，自分の意識に応えてくれるこだまとして読み始めるのである。アンジェラの秘書シシー・ミラーが自分に想いを寄せていたのではないかというギルバートの思いつきは，まず「鏡に映った自分の姿」によって肯定され，つぎに，「本能的に」手にとったアンジェラの日記のなかの言葉によって補強される。この場面を読むかぎり，Meyerowits の言葉を借りて言えば，「彼の虚栄心はまったく根拠のないものではない，というのは彼の妻の日記の最初の部分が，彼についてのアンジェラの賞讃で満たされているからだ。たぶんアンジェラは，彼のエゴを支え虚栄心を強める鏡のような役割を果たした，これは女性がよくする役割であるとウルフが主張していることである」(245)。

女性が歴史的に鏡の役割を果たしてきたことを，ウルフは George Meredith の *Egoist* から学んだというローレンスの指摘は，メロウィッツの論点を補って，まさにこの場面を解釈するための大きな手がかりを与えてくれるものであろう。

> Meredith's irony points to Willoughby's foolish egotism. Later, when asking Laetitia to marry him, he exclaims "You were a precious cameo, still gazing! And I was the object" (p. 487); he reflects that marriage with Laetitia is "marriage with a mirror, with an echo" (p. 464). ....Woolf, influenced by Meredith and aware that women have historically served as looking-glasses, "reflecting men at twice their size," allows her women to be "lamps" and magic lanterns who emit multiple perspectives and patterns. This perspective is possible because she devises methods to capture women's inner lives, thinking, and reflections. (Laurence 82–83)

さきに引用した場面におけるアンジェラの日記は，「エゴイスト」ウィ

ロビーがレティシアに期待したのと同じように，ギルバートが見たいと願う彼の姿を映し返す鏡，こだまとして彼に応えている。「彼の妻でいることはなんて誇らしいのでしょう」と日記に綴ったアンジェラは，夫が議員に立候補し，皆に歓呼で迎えられる姿を「演壇の彼のかたわらにすわって」(284) 見つづける。ギルバートがこれを読んで思い出す，彼に向けられたアンジェラの「涙をたたえた」(284) まなざしは，「貴重なカメオ，目を離さず見つづけている！」のウルフ・ヴァージョンと考えることができるだろう。

アンジェラが，少なくとも結婚当初は，夫の意識をそのまま反映させる鏡としての役割を担っていたとするならば，ジョウンは誰の鏡であるのだろうか。前に引用したジョウンの日記のなかで，彼女が夢見る荘園領主の「奥方様」としての生活を綴った個所を，ここで再び検討してみたい。

ジョウンが妻となり母となることで期待しているのは，「時間と手間の浪費」とも思える女性の生活が「自分の針仕事によって再び繕われ再び新たなものとされて」(51) 娘たちに受け継がれることである。しかしこれは，娘である彼女がいま組み込まれている父—母—娘という支配の構造をそのまま鏡のように繰り返すことに他ならない。この連鎖を断ち切らないかぎり，「父の家にあっての跳び去っていく影のような顧みられることのない存在」(51) を脱することはできないのだが，ジョウンが望むのは，ここからの脱却ではなく，母の像のレプリカを演ずることである。このように考えるジョウンにとっては，ひとを支配する側と支配される側に厳然と分けている秩序は犯しがたいものであり，自己の安全と富を支えるために彼女の下に支配され抑圧されるものがいることは当然のことと認識される。結婚のもたらす自分の変化に思いを馳せていたジョウンが，弟と執事頭の Anthony と一緒に，夕方の散歩に出かける場面は，このことをはっきりと読者に示すことになる。

ジョウンたちは，アンソニーに連れられて，生まれてはじめて，自分の

父の領地の小作人の生活を見ることになる。Beatrice Somers と彼女の夫 Peter の住む茅葺き屋根と土の床の家は，「人間の家というよりもヒースの荒野のウサギの巣穴のように」ジョウンには感じられ，寒さを避けるために家のなかに入ってはみたものの，「その臭いと熱気には耐えられなかった」(52)。ジョウンの日記は以下のようにかれらの姿を描写している。

> There was but a rotten log on which a woman sat, nursing a baby. She looked at us, not with fright but with distrust and dislike written clear in her eyes; and she clasped her child more closely. Anthony spoke to her as he would have spoken to some animal who had strong claws and a wicked eye: he stood over her, and his great boot seemed ready to crush her. But she did not move or speak; and I doubt whether she could have spoken, or whether snarling and howling was her only language.
>
> Outside we met Peter coming home from the fen, and tho' he touched his forehead to us, he seemed to have no more human sense in him than his wife. He looked at us, and seemed fascinated by a coloured cloak which I wore; and then he stumbled into his burrow, to lie on the ground I suppose, rolled in dried bracken till morning. These are the people we must rule; and tread under foot, and scourge them to do the only work they are fitted to do; as they will tear us to pieces with their fangs. (53)

この経験によってジョウンは「無垢を失い，彼女が護られている環境の外側にある世界の脅威を学ぶ」(72) とデ・サルヴォは考察しているが，はたしてそれだけであろうか。ここにあらわれている酷薄な筆致を見逃すべきではないだろう。この場面は，ジョウンが社会に対して抱いている意識の限界を示すものとして読まれるべきではないかと，私には思われるの

だ。領主の娘であるジョウンは，自分が身につけている美しい色のマントを魅せられたように見つめている男が，自分と同じ人間だとは思えない。父の「忠実な家来」(51) アンソニーが動物を扱うようにかれらに対しているのを見て，「かれらはその鉤爪で私達を引き裂こうとしているのだから」「足で踏みつけ，鞭打ってでもなんとかできる仕事をやらせ」支配しなくてはならないのだという認識をジョウンは抱く。このように支配され搾取されつづけたことが，かれらから人間らしさを失わせているということに彼女は気づくことができないのだ。

領主の家のうちにある父—母—娘という支配構造は，その下に家臣としての召使—小作人を必要とする。そして，この構造の内部で，男性—女性，親—子という上下関係が繰り返される。ジョウンが結婚によって期待するのは，この構造を一段上ることによって母のもつ力を自分のものとすることである。母となっても，夫—妻，親—子という支配構造を脱することはできないことにジョウンは気づいていない。いや，彼女はそれを当然のものとして受け入れていると考えたほうがいいだろう。ゆえに，この支配構造が，その下に支配されるものをもつことも，彼女にとっては当然のこととみなされる。であるからこそ，彼女の生活を支えるために人間らしい生活を営むことのできない，実は彼女と同じはずの人間を，ジョウンは同情を微塵もまじえず，危険な動物を見るようにただ嫌悪と恐怖の念をもって描写することができるのである。

階級と性の差異からくる支配構造を当然のものとみなす意識は，ジョウンが父と母から学んだことにちがいない。彼女の日記は，十六世紀初頭の荘園領主の父とその妻である母の生き方を，そのまま繰り返すひとりの娘の鏡のような生のありようの記録であると言ってよいだろう。ジョウンは，日記に自分の一年を綴り，書くのをやめてしまう。そして死によって，彼女は，脱したいと願っていた娘という枠を出ることなく生涯を終える。ジョウンの物語は，このように考えると，女性が支配—被支配の構造に疑問

を抱かないかぎり，そこから決して脱することはできないことを示唆しているように思われるのだ。ジョウンのような生のありようには，彼女が日記に書いた以上の変化の可能性はありえないことを，結婚することなくジョウンを死なせることで，ウルフは示そうとしたのではないだろうか。

一方，ジョウンから四百年後に，政治家の妻としての結婚生活を送るアンジェラは，夫が生きがいを見いだす仕事の世界から家庭が隔絶されている事実を身をもって体験する。ギルバートのような夫との結婚は，「家庭の娘たち」が感じている影のような自己の存在性を脱する助けとはならない。ギルバートが議員としての仕事で家を空けることが多くなり，アンジェラがその家の外で自分の存在意義を見い出しはじめるとき，彼女は夫の姿を映しつづける鏡，彼のこだまとしての生に終止符を打つ。

週に一回のアンジェラの社会奉仕活動は，資産階級に属する政治家の夫が，見ることを拒んできた，あるいは，見てみぬふりをしてきた，社会を底辺から支えている人達の視点から，自分の生活を問い直す機会となる。「非凡な同情の才」をもつと夫に言われているアンジェラは，ジョウンがもちえなかった同情を，自分の属する階級の富の維持のために搾取されつづけてきたひとたちに，特に女性たちに寄せる。同情（sympathy）とは，上のものが下にいるものに抱く憐れみではなく，かれらと自分とのあいだに共通のものを見いだすことであろう。家庭のなかで影のような存在としてしか生きられないことを知ったアンジェラは，社会のなかで同じような存在性しかもちえない彼女たちの苦しみを，自分のものとして感じたのだと考えられる。

この社会活動を通じて知りあった B.M. という男性の幼年時代の話や，彼の母が日雇い雑役婦として働きにでていたことを聞いたアンジェラは，「このことを考えると，私はこんな贅沢な生活を送っていることがほとんど耐えられない……帽子一つに三ギニーも〔費やすなんて〕！」(286) と日記に書きとめる。しかし，これを読むギルバートは，「このことを自分と

話しあってさえくれていたら，彼女が理解するにはあまりに難しすぎる問題で，彼女のかわいらしい小さな頭を悩ませないですんだのに！」(286) と嘆く。アンジェラの同情は，ギルバートにとって，度を越したものに感じられ，それは，自分より理解力の劣った「小さな頭」を持つ妻の弱点として認識されるのだ。ウルフが，ギルバートを政治家として設定したのは，社会を動かす権力にもっとも近いこの職業の男性が，ともすると，社会の底辺の問題を認識することを妨げるもっとも頑迷な偏見をもつことが多いと考えていたからかもしれない。(10)

アンジェラの日記は，彼女が夫とは別の視点を獲得したときに，夫を映す鏡であることをやめる。そして以降の日記に，「彼の名は徐々にあらわれなくなった」「彼についてなにも言及しない個所もあった」(285)。ギルバートは，アンジェラの日常の欄外(マージン)に追いやられ，二度とその中心位置を占めることはなくなってしまうのである。

（4）

はたして，こういう妻の日記に，夫が関心を示すであろうか。いよいよ，読み手の問題とからめて，女性の書き(ライティング)ものが置かれている状況について検討するときがきたようである。

自分の姿が映し出されているあいだは，ギルバートは妻の遺した日記をおもしろがって読んでいたのだが，彼に対する記述が減るにつれて，「彼の興味は薄れ」，彼は日記を「飛ばし読み」(285) しはじめる。もし，アンジェラの日記のなかの B.M. という人物がギルバートの注意を引かなかったら，彼は日記を読むことをやめてしまっていたかもしれない。ともあれ，それまで自分の名前を捜して日記を読んでいたギルバートは，B.M. が男性であると気づくと，この謎の男の正体を突きとめようと，B.M. という名前を日記のなかで追いかけることになる。

アンジェラの日記に「ギルバートの名に代わって新たに登場したB.M.

の圧倒的な記載回教」「B.M.の洪水」を前にして，彼の「自惚れ，体面，冷静さが音を立てて崩れていく」(67) という松本延夫氏の表現は，まさにこの場を表す絶妙のものであろう。しかし，ギルバートが苛立ちをつのらせていくのは，B.M.の登場回数の多さばかりではあるまい。「なぜ一度もフルネームが出てこないんだ。イニシャルを使うことにはなにか形式張らない親しみのようなものが感じられるが，これはまったくアンジェラらしくない (very unlike Angela)」と感じるギルバートにとって，B.M.は「その文字のあいだを埋めることができない」(286) 存在であり，このことが彼をますます不安にしているのである。終始イニシャルでしか表わされることのないB.M.という存在は，これまでアンジェラの日記にあらわれなかった，隠蔽と秘匿という性質の象徴的な始まりを予告している。その別な痕跡は「B.M.は……について不愉快なことを言った」「もうこれ以上……についての悪口を聞くつもりはないと彼に言った」(285) といった日記のくだりにもあらわれている。どうやら自分の名前がいったん書かれたあとで「掻き消したり」「読めないように」されたりしていると思われるこれらの個所を読むギルバートは，「なぜ一度も自分に話さなかったのか。隠しごとをするなんてまったく彼女らしくない (very unlike her)，彼女は率直さの化身 (the soul of candour) であったのに」(285) と，ますます困惑と苛立ちを強めていく。

アンジェラの日記に隠蔽，秘匿という性質があらわれるのと同時に，ギルバートの意識に，'very unlike her,' 'very unlike Angela' という思いが繰り返しわきあがっていることを見逃してはなるまい。この背後には，自分はアンジェラのすべてを知っていたはずだという彼の思い込みがあると考えられる。しかし，はたして彼はアンジェラのなにを理解していたというのか。「彼女はここにいるいちばん可愛らしい女性だ！」(283) と妻と外で食事をするたびに感じていたギルバートは，彼女の外見の美しさにはたしかに敏感であったようだ。しかし，アンジェラの性質について

はどうだろうか。たとえば，アンジェラが，シシー・ミラーについて，「彼女はまさに思慮深さそのものみたいなの，とても口が堅いし。とても信頼がおけるの，彼女にはなんでも話せるのよ」と彼に話したとき，「黒い服を着て書類カバンをもったさえない小柄の女」であるシシー・ミラーは「何千もいる」としか思えないギルバートは，妻の言葉を「彼女の非凡な同情の才」(282) によるものと片づけてしまい，真剣に考えてみることをしない。

アンジェラの生活を理解しようとしないギルバートの姿勢は，妻の日記を読む彼の態度にもあらわれている。さきに見たように，彼が日記を読みはじめたのは，そこに自分の名前を，自分の姿の反映を求めていただけであって，アンジェラの日常を理解しようとしてではなかった。このような彼にとっては，妻が家庭でしていたことは，ただそれが自分と関係しているときにのみ意味をもつ。「彼は数ページにすばやく目を走らせた，小さな些細なこと，彼女の生活を作り上げていた取るに足らない幸福な日々の些細なことがいっぱいに書き込まれたページを」(284) というギルバートの日記の読み方が，彼の考えの証左となる。このようにして，アンジェラの日常はギルバートにとって「取るに足らぬ」「些細なこと」の連続として読み飛ばされ，理解されることなく彼の手から逃げ去ってしまう。そして，アンジェラの日記がギルバートという読み手の目を通してしかあらわれない以上，アンジェラが実際に日記になにを書いていたのかを知ることは読者には許されず，彼女の日常を作り上げていたことが本当に「取るに足らぬ」ことであるのかも，謎のままでありつづけることになってしまうのだ。

また，彼がアンジェラに冠している「非凡な同情の才」「率直さの化身」といった仰々しい響きのする言いまわしは，現実のひとりの女性の真の姿を捉えるには，あまりに安直で空虚なキャッチフレーズに思われる。このような表現でアンジェラを理解したつもりになる，あるいは，このような

おざなりなフレーズで彼女の性格を限定してしまおうとするギルバートは，真のアンジェラらしさをとり逃がしてきたとも言えるはずだ。メロウィッツが指摘しているように，ギルバートにとっては，「個人的な成功と人生の素晴らしさは内閣での地位にあり，個人的な関係や親子関係にはない。そのうえ，彼は妻の個人としての性格に少しの敬意も払わず，ただ彼女を，自慢できる美しいオブジェとして，自分の要求に答える召使として見ている」(245) にすぎない。だからこそ，アンジェラは，こういう夫にはなにも話さず，シシ・ミラーとのあいだに「なんでも話せる」信頼関係をもったのだろう。妻が遺した日記の空白を埋めるために，ギルバートが最後に頼らなくてはならなかったのが，この「さえない小柄の女」シシー・ミラーであったという物語の結末を，妻の言葉をまじめに受けとらなかった男に対するウルフの辛辣な皮肉をこめたしっぺがえしとして読むことも可能であろう。

ウルフはこの物語をこう締めくくっている，「彼は彼への遺産を受けとっていたのだった。彼女は彼に真実を語っていたのだった。彼女は歩道から足を踏み出したのだ，恋人と再び一緒になるために。彼女は歩道から足を踏み出したのだ，彼から逃れるために。(He had received his legacy. She had told him the truth. She had stepped off the kerb to rejoin her lover. She had stepped off the kerb to escape from him.)」(287)。ウルフがこの最後の文章を過去完了時制で書いていることに注意すべきであろう。妻の遺した日記を読んだあとで，「真実を知らなくては」(287) と感じたギルバートは，シシー・ミラーに電話をかけている。しかし，真実は，日記のなかに，すでに語られていたのである。物語の結びが，「彼から逃れるために」で終わっていることは，アンジェラが彼の手をすり抜けていったという印象を，つよく読者に与えるものではないだろうか。

「遺産(レガシー)」は，妻の死が，自殺した恋人のあとを追っての自殺であったこ

とに気づくまでの，推理小説仕立てのひとりの男の皮肉な物語というだけにとどまらない。それは，ひとりの男性と結婚し，ついに死ぬまで自分の存在の本当の姿を夫から理解されることなく死んだひとりの女性の悲劇でもあるのだ。いや，たしかに悲劇には違いない。しかし，物語の結びはアンジェラの死が，「恋人と再び一緒になるための」，そして，夫から「逃れるための」，彼女自身によって選びとられたものであることを宣言している。ローレンスは，『船出』のレイチェルと『波』の Rhoda の死が，「女性の声の終焉を象徴的に表している」と指摘し，さらに，「彼女たちの沈黙は二重の拒絶」，つまり，「社会が女性に要求する役割に対する抵抗と拒絶」であると同時に「自己を破滅から守る努力を拒絶して自殺を選んだ」「条件つき降伏」(145) であると考察している。アンジェラの自殺も，この意味で，自分の姿を映す鏡のなかに彼女を閉じ込めようとする夫との生活を拒絶するための抵抗と，条件つき降伏の表現であると考えることができるだろう。

ジョウンの日記の「最後のページ」には，父によって自分の日記が読まれ保管されるであろうことが書かれている (61)。父と母の生活をそのまま繰り返す鏡としての役割を最後まで捨てることはないジョウンは，自分の日記が，「読んだり書いたりする彼女の能力を少なからず誇りに思っている」(60) 父によって読まれることに，不安を感じることはない。一方，アンジェラの日記は，「彼女が生きていたときにふたりが分かちあわなかったただ一つのもの」であり，それを読むことを彼女は「もし私が死んだら—たぶんね」(281) とギルバートに言っていたものであった。しかし，アンジェラは，本来は自分だけの場であった日記が自分の死後に夫に読まれることを予測しはじめたとき，つまり，彼女が死を身近なものと感じはじめたとき，その侵入に備えて防御の姿勢をとりはじめる。彼女は，まず B. M. が糾弾した夫の名前を日記から消し去り，次第に，B. M. の語ることをすべて書くことができなくなる。B. M. とふたりきりで話したときの

ことを書きとめた個所は，「私は彼に話を聞いてもらおうとした。けれども彼は聞こうとしなかった。彼はやってやると言っておどした，もし私が……」という文章の中途からそのページ全体が掻き消され，ページ全体に「エジプト。エジプト。エジプト。」と書かれてあるために，ギルバートは「一文字も読みとることが」(286) できない。いつ彼女がこのページに「エジプト」と書いたのかはわからない。しかし，このページを読めなくしたときのアンジェラは，この世で結ばれることがないなら自殺するという B.M. の言葉に対して，自分の答えを出していたということはまちがいない。死んでもなお，彼女が夫から自分の思いを隠蔽し，秘匿することを選んだことが，彼女のその決意の証拠となることを，このページは物語っているのである。

しかし，これを読むギルバートは，「あの悪党は彼女に愛人になってくれと頼んだのだ」という彼にとっては「たったひとつの解釈」(286) に飛びつき，アンジェラと B.M. の死ぬことまでも思いつめた真剣な恋を，一時的な情事に還元してしまう。ウルフは，徐々に言葉を綴ることをやめていくアンジェラの日記と，それを読むギルバートを，以下のように描いている。

> He turned the pages rapidly. What had been her answer? Initials had ceased. It was simply 'he' now. 'He came again. I told him I could not come to any decision.... I implored him to leave me.' He forced himself upon her in this very house? But why hadn't she told him? How could she have hesitated for an instant? Then: 'I wrote him a letter.' Then pages were left blank. Then there was this: 'No answer to my letter.' Then more blank pages; and then this. 'He has done what he threatened.' After that—what came after that? He turned page after page. All were blank. But there [,] on the very day before her death [,] was this entry: 'Have I the courage to do it too?' That was the end. (286)

アンジェラの苦悩する心は，もはやその思いを文字に，文章にすることができない領域に踏み込んだということができるかもしれない。あるいは，彼女がその思いを空白のページでしか語れなかったのは，この日記が夫に読まれることを確信していたからかもしれない。いずれにせよ，ギルバートにとっては，アンジェラの日記の白いままのページは無でしかない。彼はただ文字を求めてページを繰りつづけ，その空白のページを埋める努力をしようとはしない。かくして，彼女の日記は，意図したとおりに読まれることなく，閉じられるのである。

このように考えるとき，「ジョウン・マーティン嬢の日記」と「遺産（レガシー）」は，女性の書き（ライティング）ものが，読み手の意識次第で，いかに違ったものとなりうるかを示す，対照的な物語として読めるはずである。女性の書き（ライティング）ものは，その価値を理解する読み手に対してはその全貌をあらわし，そうでない読み手に対しては断片としてしかその存在意義を認識されない。ジョウンの日記は，理想的な発見者ロザリンド・メリデューと出会ったために再びその声を取り戻した。アンジェラの日記は，逆に，ギルバートの意識によって断片となり，誤読され，十全にその価値を語ることを阻まれ，二度と読まれる可能性なく閉じられてしまう。

しかし，アンジェラが白いまま残したページは，その空白を埋めることのできない読み手に対する挑戦と考えることもできるはずだ。Susan Gubar の有名な論文 "'The Blank Page' and the Issues of Female Creativity" は，Isak Dinesen の短篇 "The Blank Page" に語られるひとりの王女の婚礼の夜の空白のシーツの意味を，「王女の抵抗は，自己表現とみなされよう。彼女は，自分が書くよう期待されているものを書かないことによって，自分の考えを表明しているからである。なにも書かれないということは，換言すれば，女性のための新しい書きものの条件といえよう。読むすべを知らぬ人々にとってなにも見えないのに，修道女たちやこの物語の語り手はその同じ場所に知恵を見出す」(30)[11] と読み解い

てみせている。「遺産」は，この意味において，「女性のための新しい書きもの（writing)」が誕生するまでの物語であるということもできるはずだ。ギルバートによって読み飛ばされる「些細なこと」をぎっしり書き込んだページ，彼が望むのとは異なる社会を見る視点の獲得，隠蔽と秘匿によってページを自分だけのものとする抵抗，そして，彼には無としてしか見えない空白のページ—これらはすべて，夫が「書くよう期待しているものを書かない」ことで新たな物語を生み出そうとするアンジェラの挑戦として読めるはずである。こう考えると，真実を語る彼女の言葉を読もうとしなかった彼が，死＝沈黙という「遺産」を彼女から受けとるのは，あまりにも当然のことであると言わねばなるまい。

さいごに，ウルフがその作家生活の始めと終わりに女性の日記をめぐる物語を書いた意味を確認しておきたい。それは，女性の生の閉塞性と躍動性の両方を描くことだったのではないだろうか。ジョウンの日記は冬に始まり，再びめぐってきた冬に終わる。このあとで彼女が結婚していたら，大きな変化があったのであろうが，読者は彼女が独身のまま一生を終えたことを知らされている。季節が再びめぐってもとの冬を再現するように，ジョウンの生はその一年の記録に閉じ込められたまま，変化の芽を摘みとられたような印象を読者に与える。これに対してアンジェラの「十五冊の」日記は，彼女がギルバートと結婚してからの歳月の間の彼女の変化を記録している。「遺産」は全体としても，ジョウンの日記のおよそ三分の一の長さしかない。そのうえ，アンジェラの日記は断片のかたちでしかあらわれない。にもかかわらず，あるいは，それゆえに，夫ギルバートの手をすり抜ける，変化してやまないアンジェラの生のとらえがたさがつよく読者に感じられるのではないだろうか。ジョウンの日記そのものから伝わってくる季節とともに日々を繰り返す女性の閉塞した生活と，アンジェラの日記に綴られる自己の存在の意味を求めて変化し躍動する生のありようは，対照的であると同時に，女性という同じ像の裏表であるという意味で，

相互補完的でもあると言えるだろう。そう，まるで向かいあう鏡のように。

注

(1) "Women and Fition" については，朱牟田房子氏の訳をお借りした。ヴァージニア・ウルフ『評論』ヴァージニア・ウルフ著作集 7（東京：みすず書房，1976）191-202。

(2) Cf. グスタフ・ルネ・ホッケ『ヨーロッパの日記』全2巻。

(3) この点については，拙論「おしゃべりの効用—『船出』におけるレイチェルの場合」を参照されたい。

(4) ローレンスは，*Jacob's Room* 以降，ウルフの小説のなかでは，登場人物たちのあいだに起こるコミュニケーションの多くが声に出したり聞こえたりしないと指摘している，(Laurence 96)。

(5) ホッケは，「過去五百年のあいだに書かれた〈もっとも純粋な〉日記」の共通点として，「断片性のなかにみられるスタッカートとレガートの混和」をあげている，(第1部 17)。

(6) Cf. Dick 311.

(7) Virginia Woolf, *The Letters of Virginia Woolf*. Vol. 6, 463 and 469.

(8) ウルフが小説を鏡として捉えていることを示す一例として，*A Room of One's Own* の "If one shuts one's eyes and thinks of the novel as a whole, it would seem to be a creation owning a certain looking-glass likeness to life, though of course with simplifications and distortions innumerable." (68) をあげておく。

(9) 松本信夫氏の訳語「彼女の特別な同情の才」を参考にさせていただいた。また，松本氏は，二度繰り返されるこの言葉が物語さいごの「皮肉な事の成り行きを一層際立たせるのに役だっている」と考察している (68)。

(10) 欄外(マージナルな)の位置から社会を眺めつづけてきたレイチェルが，帝国の繁栄を第一と考える政治が見落としてきたことがあることを，「国中の未亡人」(71) の孤独な生活を描くことで語ろうとしたとき，それを「女性にはいわゆる政治を見る天性の力が欠けているんです」(72) と言って切り捨てようとした『船出』のRichard Dalloway もまた，保守党の政治家として設定されている。

(11) 青山誠子氏の訳をお借りした。エレイン・ショーウォーター編『新フェミニズム批評：女性・文学・理論』青山誠子訳（東京：岩波書店，1990）367—68。

引証資料

Bell, Quentin. *Virginia Woolf*. 2 vols. 1972. 黒沢茂訳『ヴァージニア・ウルフ伝』第1巻 東京：みすず書房，1977.

DeSalvo, Louise A. "Shakespeare's *Other* Sister." Jane Marcus 61-70.

Dick, Susan, ed. *The Complete Shorter Fiction of Virginia Woolf*. Expanded and revised ed. London: The Hogarth Press, 1989.

Eagleton, Terry. *Literary Theory*. 1984. 大橋洋一訳『文学とは何か：現代批評理論への招待』東京：岩波書店，1985.

舟橋美香.「おしゃべりの効用—『船出』におけるレイチェルの場合」日本ヴァージニア・ウルフ協会『ヴァージニア・ウルフ研究』7 (1990)：9—23.

Gubar, Susan. "'The Blank Page' and the Issues of Female Creativity." *The New Feminist Cristicism: Essays on Women, Literature, and Theory*. Ed. Elaine Showalter. London: Virago Press, 1986. 292-313.

Hocke, Gustav René. *Das Europäische Tagebuch. Beiträge zur vergleichenden Literaturgeschichte*. 1963. 石丸昭二・柴田斎・信岡資生訳『ヨーロッパの日記』全2部 東京：法政大学出版局，1991.

Laurence, Patricia Ondek. *The Reading of Silence: Virginia Woolf in the English Tradition*. Stanford, California: Stanford UP, 1991.

Marcus, Jane, ed. *New Feminist Essays on Virginia Woolf*. 1981. London and Basingstoke: Macmillan, 1985. Paper ed.

松本延夫.「ヴァージニア・ウルフの短篇小説（下，3）—物語の機能」『明治学院論叢』453 英語・英米文学75 (1999)：51—68.

Meyerowits, Selma. "What is to Console Us?: the Politics of Deception in Woolf's Short Stories." Marcus 238-52.

Minow・Pinkney, Mariko. *Virginia Woolf and the Problem of the Subject*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers UP, 1987.

Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own*. Paper ed. Princeton: Princeton UP, 1977.

Woolf, Virginia. "[The Journal of Mistress Joan Martyn.]" Dick 33-62.

——. "The Legacy." Dick 281-87.

——. *The Letters of Virginia Woolf*. Vol. 6. Ed. Nigel Nicolson. Assistant ed. Joanne Trautmann. London: Chatto & Windus, 1980.

——. *Mrs Dalloway*. 1925. London: The Hogarth Press, 1963.

——. "[Phyllis and Rosamond.]" Dick 17-29.

——. *A Room of One's Own*. 1929. London: Granada, 1981.

——. *The Voyage Out*. 1915. London: The Hogarth Press, 1971.

——. "Women and Fiction." *Collected Essays*. Vol. 1. Ed. Leonard Woolf. London: The Hogarth Press, 1966.